

## 第5回 コンビナート高度統合研究会 議事要旨

1．日時：平成17年11月25日（金）13：00～15：00

2．場所：霞ヶ関ビル 33階 東海大学校友会館 富士の間

3．出席者：

伊丹委員長、長谷部委員、堤委員、小柳委員、増田委員、齋藤委員、大野委員、原田委員、高下委員、中川委員、井内委員、箱崎委員、山根委員

4．議題

内外コンビナートの最新運用実態について

(1) 海外調査報告

(2) コンビナート競争力総合評価中間報告

(3) 中間論点整理

5．議事概要

委員からの主な発言は、以下のとおり。

海外における最終製品としての価格競争力というのは、日本のコンビナートの石化プラントから出てくるものと比較して、どれくらいの価格差あるいはコスト差があるのか。

コンビナートを統合して1つの企業が全部運営すると、石化の部分だけでのコスト差がどれくらい出てくるかというところについて大きな関心がある。

中国では石油精製と石油化学はパイプラインで繋がっており、石油から化学に原料が供給されている。そのなかで、石油化学のものを石油精製の原料としてうまく活用する方法を探しており、日本のコンビナートが今進めていることに関しては強い関心を持っている。

汎用石化のプラントについては、中東でも現地人が運転している。彼らが今必要としているのはもっと付加価値の高い製品を製造する方法、環境対策および安全・安定運転を維持する方法である。

韓国では、石油精製規模の大きな会社が、コンビナートをリードして儲かる製品を大量に中国に輸出するという戦略を取っている。それゆえ、石油・石化コンビナートとして付加価値を高めた製品を製造していこうという動きはまだ少ない。

欧州に関して、日本の石油精製・石油化学が有し得ない競争力の一つはパイプライン網である。日本では、高コスト等によりパイプラインを欧州のように設置することができない。また、ドイツでは、有機化学の長い伝統のなかで、非常に分厚い製品系列と高度の技術を持っている。会社

の規模の面や技術の蓄積の面からも、日本は少し水をあけられているという印象である。

日本のコンビナートはもっと石油精製と石油化学のインテグレーションをしないと、世界的な趨勢からすると遅れていると考えられる。

石油・石化の大きなインテグレーションとして、エチレン、プロピレン、ベンゼンという原料のやり取りをコンビナート内の石油精製、石油化学の壁を全部取り払ってやれば全体最適化ができると思うが、パイプラインがあっても企業の壁があるので、難しいところがある。

石油産業と石化産業の全体最適化の範囲をどう考えるのか、エネルギーまで含めたトータルの競争力、共同運営すべき対象は何か、コンビナート全体を最適運営する仕組みは何か等について、更に検討する必要がある。

以上

## コンビナート高度統合研究会名簿

(敬称略)

### 委員長

いたみひろゆき  
伊丹 敬之

一橋大学大学院 商学研究科 教授

### 委員

きっかわたけお  
橘川 武郎

東京大学 社会科学研究所 教授

はせべしんじ  
長谷部伸治

京都大学大学院 工学研究科 化学工学専攻 教授

つつみあつし  
堤 敦司

東京大学大学院 工学系研究科 化学システム工学専攻 助教授

こやなぎあさむ  
小柳 治

日本政策投資銀行 総務部 審議役

ますだたかし  
増田 貴司

東レ経営研究所 産業経済調査部長

さいとうじゅん  
齋藤 旬

東京大学先端科学技術研究センター 客員研究員

株式会社ニコン コアテクノロジーセンター 主幹研究員

おおのひろし  
大野 博

新日本石油精製株式会社 代表取締役 副社長

はらだまさお  
原田 征夫

出光興産株式会社 代表取締役 副社長

こうげえつじろう  
高下悦仁郎

三菱化学株式会社 常務執行役員〔石化セグメント分担(石化基礎分野)〕

なかがわじゅんいち  
中川 淳一

三井化学株式会社 執行役員〔市原工場長〕

いうちけんすけ  
井内 謙輔

丸善石油化学株式会社 取締役 技術開発部長

はこざきけいいち  
箱崎 慶一

経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部 石油精製備蓄課長

やまねけい  
山根 啓

経済産業省製造産業局 化学課長

計 14 名